

「第77回 正倉院展」開催概要

The 77th Annual Exhibition of Shōsō-in Treasures

2025年10月25日（土）～11月10日（月）

奈良国立博物館 東西新館（奈良市登大路町50番地 奈良公園内）

奈良国立博物館（所在地：奈良市/館長：井上 洋一）は、「第77回 正倉院展」を、2025年10月25日（土）～11月10日（月）の会期で開催いたします。概要は以下の通りです。

展覧内容

古都・奈良に秋の深まりを知らせる正倉院展が、今年、77回目の開催を迎えます。正倉院宝物は、校倉造り^{あぜくらづく}で知られる正倉院正倉におよそ1300年ものときをこえて守り伝えられてきた宝物群です。奈良時代に日本を治めた聖武天皇^{しょうむてんのう}のご遺愛品をはじめ、平城京を舞台に花開いた天平文化^{すい}の粋^{ちよくふう}を伝える貴重な品々で構成されており、その数はおよそ9000件にものぼります。天皇の勅封^{ちよくふう}という厳重な管理体制のもと、まとまったかたちで今日まで守り伝えられた稀有^{けう}の宝物群であり、世界的にもきわめて高い価値を誇っています。

今年の正倉院展でも選りすぐりの宝物が会場を彩り、私たちを天平の華やぎの世界へと誘います。聖武天皇の身近におかれた「木面紫檀双六局」^{もくがしたんのすごろくきよく}（北倉37）、「鳥毛篆書屏風」^{とりけてんしよのびようぶ}（北倉44）といった宝物は、高貴な素材と技が駆使された最高級の調度品で、華やかで知的な雰囲気にあふれた宮廷生活を偲ばせます。一方、ほとけへの捧げものを収めた「黒柿蘇芳染金銀山水絵箱」^{くろがきす}（中倉156）など、技巧を凝らした祈りの宝物を通じて、仏教をよりどころとした当時の人々の心にも近づくことができるでしょう。また、豊麗な花文様を表した「花氎」^{かせん}（北倉150）、深い紺色がなんとも美しい「瑠璃坏」^{るりのつき}（中倉70）、名香「蘭奢待」^{らんじゃたい}として世に知られる「黄熟香」^{おうじゅくこう}（中倉135）など異国情緒あふれる品々から、シルクロードを通じた当時の国際色ゆたかな都の情景が垣間見えます。

宮内庁正倉院事務所による最新の宝物調査の成果も織り交ぜながら、豪華なラインナップで開催する今年の正倉院展を、ぜひともご堪能ください。



《報道関係者お問い合わせ先》

「第77回 正倉院展」広報事務局（TMオフィス内） 担当：馬場・永井・西坂

MOBILE：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）

TEL：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032 EMAIL：shosoin-ten@tm-office.co.jp

主な出陳宝物

北倉10	げしゃく 牙笏（象牙製の笏）	1枚
北倉37	ちくがしたんのすごろくきょく 木画紫檀双六局（寄木細工の双六盤）	1基
北倉42	へいらでんはいのえんきょう 平螺鈿背円鏡 つけたり 附 だいせん 題箋（螺鈿飾りの鏡）	1面
北倉44	とりげてんしよのびようぶ 烏毛篆書屏風（烏毛の文字屏風）	6扇
北倉150	かせん 花氈（花文様のフェルトの敷物）	1床
中倉35	てんびょうほうもつふで 天平宝物筆 だいぶつかいげん （大仏開眼に用いられた筆）	1枝
中倉70	るりのつき 瑠璃坏 つけたり 附 うけざ 受座（ガラス製のさかずき）	1口
中倉135	おうじゅくこう 黄熟香（香木）	1材
中倉156	くろがきすおうぞめきんぎんさんすいえのはこ 黒柿蘇芳染金銀山水絵箱（山水文様の献物箱）	1合
南倉125	くわのきのげんかん 桑木阮咸（丸い胴の絃楽器）	1面

主な出陳宝物の解説

※単位は、寸法＝センチメートル、重量＝グラム

※写真提供＝宮内庁正倉院事務所

〔出陳番号47〕

北倉10

げしゃく
牙笏 1枚（象牙製の笏）

前回出陳年：平成10年（1998）

長38.9 幅5.2（頂）／5.5（底）

厚1.3（頂・底）

しゃく
笏とは、天皇や役人が朝廷で威儀を正すために手にもつ細長い板のこと。本品は『国家珍宝帳』に記載された象牙製の笏。同帳によると、「通天牙笏」（北倉11）、「大魚骨笏」（北倉12）とともに、天武・持統系の六代の天皇に継承された「赤漆文観木御厨子」（北倉2）に納められていたようで、正倉院に伝わる笏の中でも格別の由緒を誇る。近年の正倉院事務所の調査で、象牙の表面に近い部分を長軸方向に沿って長く切り出した材料を用いていることが明らかになった。



〔出陳番号1〕

北倉37

もくがしたんのすごろくきょく

木画紫檀双六局 1基（寄木細工の双六盤）

前回出陳年：平成24年（2012）

縦54.3 横31.0 高16.7

こっかちんぼうちょう

しょうむてんのう

しょうきやく

『国家珍宝帳』に記載された聖武天皇ご愛用の双六盤。四周に立ち上がりをつけた盤面に床脚が付く姿である。木胎の上から外来のシタンの薄板を貼って作られており、表面には木画という寄木細工の技法で鳥や唐草の装飾文様が凝らされる。木画はツゲ、シタン、コクタン、象牙、鹿角、竹といった多彩な素材を用い、個々のモチーフを彩りゆたかに、かつ生き生きと表現している。高貴な素材と高度な技術が結実した、天皇ゆかりにふさわしい品格を誇る宝物である。



全姿



部分

〔出陳番号16〕

北倉42

へいらでんはいのえんきょう つけたり だいせん

平螺鈿背円鏡 附 題箋 1面（螺鈿飾りの鏡）

前回出陳年：平成25年（2013）

径 27.2 縁厚 0.8 重 2473.6

こっかちんぼうちょう

しょうむてんのう

『国家珍宝帳』に記載された、聖武天皇ゆかりの鏡20面のうちの1面。鏡の背面は南海に産するヤコウガイの貝片を用いた螺鈿で華やかな文様が表され、地の部分にはトルコ石やラピスラズリの小片が埋め込まれている。分析の結果、鏡胎が中国・唐代の銅鏡の標準的な化学組成と一致したことから、シルクロードの各地で産出された素材を用いて中国で製作され、日本にもたらされたと考えられる。



[出陳番号14]

北倉44

とりけてんしょうのびょうぶ

鳥毛篆書屏風 6扇（鳥毛の文字屏風）

前回出陳年：第1・2扇：令和元年（2019）東京国立博物館、平成18年（2006）

第3・4扇：平成27年（2015）九州国立博物館、平成15年（2003）

第5扇：平成21年（2009）東京国立博物館、平成3年（1991）

第6扇：平成21年（2009）東京国立博物館、昭和43年（1968）

第1扇：長149.0 幅 56.5 第2扇：長 149.3 幅 56.8

第3扇：長149.2 幅 56.6 第4扇：長 149.0 幅 56.3

第5扇：長149.0 幅 56.5 第6扇：長 149.0 幅 56.5

『^{こっかちんぼうちよう}国家珍宝帳』に記載される六曲屏風。各扇には草花や飛鳥などの地文様の上に、八文字の篆書と^{てんしよ}同字の楷書を交互に表す。紙の地には吹絵の技法で文様と楷書部分を白抜きにして表し、楷書部分には地色と異なる色で吹き付けと点描を施す。篆書部分には二ホンキジなどの羽毛を貼り付け、金箔の小片を散らす。屏風は部屋の間仕切りなどに用いるもので、本品は君主にとっての戒めの格言を表すことから^{しょうむてんのう}聖武天皇の身近に置かれるにふさわしい調度といえる。



第3扇



第2扇



第1扇



第6扇



第5扇



第4扇

〔出陳番号51〕

北倉150

かせん
花氈 1床（花文様のフェルトの敷物）

前回出陳年：平成19年（2007）

長272 幅139

濃密な大唐花文様を全面に表した羊毛製フェルトの敷物。このような文様を表すフェルトの敷物を「花氈」といい、唐からの舶載品と考えられる。本作は藍や緑、赤などに染められた羊毛による非常に複雑な文様が精緻に表現されており、きわめて高い製作技術がうかがわれる。正倉院に伝来する37点の花氈のなかでも色彩表現が豪華で、花氈を代表する品である。裏面には「東大寺」の墨書と「東大寺印」と読める朱印が捺され、法要の場で用いられたと考えられる。



〔出陳番号26〕

中倉35

てんぴょうほうもつぶで
天平宝物筆 1枝（大仏開眼に用いられた筆）

前回出陳年：平成22年（2010）東京国立博物館、平成11年（1999）

管長56.6 管径4.3

東大寺大仏の開眼法要に用いられた特大の筆。天平勝宝4年（752）の開眼法要に加え、筆管に線刻された銘文により、文治元年（1185）に再興された大仏殿での開眼法要でも後白河法皇が用いたことが知られる。筆の軸は斑点模様を人為的に表現した仮斑竹であり、着色の濃淡や配置も見所である。筆の穂先は毛を紙巻で仕立てる方法で形作られ、現在、毛はほとんど脱落するが墨の痕も認められる。東大寺大仏開眼という古代仏教を象徴するセレモニーをいまに伝える貴重な筆である。



〔出陳番号67〕

中倉70

るりのつき つけたり うけざ
瑠璃杯 附 受座 1口（ガラス製のさかずき）

前回出陳年：平成24年（2012）

口径8.6 高11.2 重262.5

気品ある美しさをたたえた紺色のガラス器。表面に円環を貼りめぐらせた杯身を高脚が支える意匠は異国情緒にあふれ、本品がはるか西方で作られたガラス器であることを物語る。一方、杯身の下方に取り付けられた銀製の台脚は、裾に龍のような文様が表されることから、東アジア圏において付け加えられたものとみられる。西方産のガラス器がはるばるシルクロードを経て東アジアにもたらされ、珍重されたことをうかがわせる。この種のガラス器の中でも、姿・技法ともに最高水準を示す逸品である。



〔出陳番号19〕

中倉135

おうじゅくこう
黄熟香 1材（香木）

前回出陳年：令和元年（2019）東京国立博物館、平成23年（2011）

長 156.0 重 11.6kg

ジンチョウゲ科の樹木に樹脂が沈着してできた香木。^{らんじゃたい}「蘭奢待」（文字に「東大寺」の三文字を隠した雅号）とも呼ばれ、名香として名高い。分析の結果、ベトナムからラオスにかけての山岳地帯で産出されたものと成分が近いとされる。多数の切り取られた痕跡があり、うち3か所には^{あしかがよしまさ}足利義政や^{おだ のぶなが}織田信長、^{めいじてんのう}明治天皇が切り取った旨を示す^{しせん}紙箋が付属する。近年の調査によると香氣成分は残存しており、現在も香りを留めているという。



〔出陳番号39〕

中倉156

くろがきすおうぞめきんぎんさんすいえのはこ

黒柿蘇芳染金銀山水絵箱 1合（山水文様の献物箱）

けんもつばこ

前回出陳年：平成21年（2009）

縦18.0 横38.8 高12.5

ほとけに対して捧げものをする際に用いられた献物箱という容器で、箱自体が大変美しく仕立てられている。赤みのある落ち着いた茶色地は、黒柿を蘇芳という赤い染料によって染めることで、貴重な外来素材のシタンに似せたもの。注目したいのは蓋表をはじめ各所に施された金銀泥による文様表現である。蓋表には四辺から中央にむけてせり上がる峻険な山々が表され、幾重にも折り重なる山巒や立ち昇る雲の様子が、闊達な筆裁きで描かれている。



全姿



蓋表

〔出陳番号29〕

南倉125

くわのきのげんかん

桑木阮咸 1面（丸い胴の絃楽器）

どう

前回出陳年：平成26年（2014）

長 102.0 胴径 38.2

円形の胴を持つ四絃の楽器。名称は「竹林七賢」の一人で琵琶の名手とされた阮咸に由来すると言われる。中国で成立したと考えられるが、古代の遺例は本品の他に「螺鈿紫檀阮咸」（北倉30）のみである。主要部分を蘇芳で染めたクワ材で作り、細部は木画や玳瑁などで装飾する。胴部中央の皮製の捍撥（撥受け）には、背景として八弁の大きな赤い花を、中央部に松や竹の下で高士が囲碁を楽しむ情景を描く。胴の背面に「東大寺」の刻銘があり、東大寺の法要で用いたことがわかる。



捍撥部分



全姿

開催概要

展覧会名：第77回 正倉院展

会 期：2025年10月25日（土）～11月10日（月） ※会期中無休

会 場：奈良国立博物館 東西新館

所在地 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50番地

開館時間：8:00～18:00

※金・土・日曜日、祝日は20:00まで

※入館は閉館の60分前まで

出陳件数：出陳宝物 67件（北倉17件、中倉19件、南倉28件、聖語蔵3件）

うち6件は初出陳 ※宝物一覧は別紙

主 催：奈良国立博物館

特別協力：読売新聞社

観覧券情報：日時指定券を販売予定です。詳細は8月下旬にリリースいたします。

奈良国立博物館問い合わせ：050-5542-8600（ハローダイヤル）

奈良国立博物館ウェブサイト：<https://www.narahaku.go.jp/>

正倉院展ホームページ：<https://shosoin-ten.jp/>

交通案内：近鉄奈良駅下車 徒歩約15分。

またはJR奈良・近鉄奈良駅から市内循環バス外回り「氷室神社・国立博物館」下車すぐ。

《報道関係者お問い合わせ先》

「第77回 正倉院展」広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・永井・西坂

MOBILE：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）

TEL：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032 EMAIL：shosoin-ten@tm-office.co.jp